香川県中学校教育研究会保健体育部会研究大会

事前研究の手引き

香川県中学校教育研究会保健体育部会

１　研究主題

健康の保持増進と豊かなスポーツライフを実現する保健体育学習の創造

－主体的・対話的に見方・考え方を働かせる生徒の育成－

２　主題設定の理由

平成２９年告示の学習指導要領では、生徒が身に付けるべき資質・能力を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理し、その内容等の改善が図られた。加えて生徒が体育・保健の「見方・考え方」を働かせながら学びを進められるように指導を改善すること、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが示された。これからの時代を生きる子供たちが、明るく豊かで活力ある生活を営むためには、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することが重要である。

本県において、令和３年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の体力調査（中学校２年生）では、体力合計点をみると、男女ともに全国平均をやや上回っている。また同調査の質問紙調査では、「運動やスポーツをすることは好きですか」という質問に対し、男女とも全国平均を上回っており、男女は88.5％、女子は78.1％の生徒が肯定的な回答を示している（全国平均は男子87.2％、女子75.4％）。また、「あなたにとって運動やスポーツは大切なものですか」という質問に対し、男女とも全国平均をやや上回っており、男子は93.5％、女子は90.1％の生徒が肯定的な回答を示している（全国平均は男子89.9％、女子は83.1％）。この質問紙の結果は、本県保健体育科のこれまでの授業や学習指導の成果といえるとともに、今後も継続できるよう保健体育学習のあり方を考えていくべきである。

共生の視点に基づく男女共習の推進など学習指導要領全面実施から３年目を迎え、これからの保健体育学習に求められているものは何か、今一度問い直す必要があるのではないだろうか。香川県内全ての中学保健体育科教師が、体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無等にかかわらず、全ての生徒が生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することができる保健体育学習をめざしたい。そこで、香中研保健体育部会三観支部では、平成２９年度から令和元年度までの３年間、次のように研究を進めてきた。

平成２９年度

「主体的・対話的で深い学び」

研究のキーワード：課題設定、学び合い・高め合い、振り返り

平成３０年度

「生徒の思いや考えをつなぐ」

研究のキーワード：課題設定、対話、振り返り

令和元年度

「見方・考え方を広げ、深める発問の工夫」

研究のキーワード：見方・考え方、発問、学習過程

《令和元年度からの「基本となる授業改善の５つの工夫」》

①単元の構成や課題設定の工夫 ②教材、教具、ルールの工夫 ③チーム編成の工夫

④苦手な生徒が楽しめる工夫 ⑤振り返りの方法の工夫

【継続的な研究の視点】

Ⅰ基礎・基本の習得と体力の向上　　Ⅱ活用できる能力の育成　　Ⅲ魅力ある授業づくり

「基本となる授業改善の５つの工夫」の実践を通して、特に、「①単元の構成や課題設定の工夫」と「⑤振り返りの方法の工夫」が見方・考え方を働かせる学習過程の工夫をするうえで重要性であると考えた。運動や健康に関する課題を発見するためには、①により生徒を教材に向き合わせたり問題意識を掘り起こしたりできること、課題解決を図る主体的・協働的な学習活動とするためには、⑤によりこれまでに学んだことが生徒の実生活や社会とつながり、学ぶ必要性を実感させることができたからである。これらは、生徒の考えを再度揺さぶり、見方・考え方を働かせる起点になると考えた。そこで、教師が学習過程において生徒に仕掛けることができる起点として、教師の意図的な「発問」に着目し、「見方・考え方」を働かせることを促す学習過程の中での発問の工夫を研究の柱とした。

３　研究の概要

(1)研究構想図

健康の保持増進と豊かなスポーツライフの実現

|  |  |
| --- | --- |
| 保健体育学習における主な学び | めざす生徒の姿 |
| ○　できなかったことができるようになり、そのことを自覚すること。  ○　できるようになるために、現時点での自分の課題やその課題を解決する道筋が分かること。  ○　目の前の運動に没頭し、その運動がもつ本質的な魅力や面白さが分かること。  ○　日常生活と健康・安全に関する知識がつながること。 | ⅰ　「やったー」「できた」「分かった」「なるほど」等の言葉や表情等で表現する。【各授業】  ⅱ　自他の変容を認識し、自分なりの言葉で説明したり、書いたりしている。  【単元の節目や終末】  ⅲ　実生活や実社会と保健体育科のつながりを自分なりの言葉で説明したり、書いたりしている。　　　　【１年間または３年間を通して】 |

【共生】いつでも　どこでも　　　　　誰とでも　いつまでも

単元や３年間、学びを繰り返すことで・・・

「発問」を核に学習過程を工夫した授業

「発問」の工夫

・単元を通した発問

・生徒の課題意識を掘り起こす発問

・生徒の考えを再度揺さぶる発問

学習過程の工夫

・男女共習の単元構成や課題設定の工夫

・教材、教具、ルールの工夫

・チーム編成の工夫

・振り返りの工夫

・苦手な生徒が楽しめる工夫

学習者（生徒）

ＩＣＴの活用

・思考を広げる

・つなぐ（生徒間、生徒と教師、外部）

・アプリ等の活用

(2) 発問を核とした見方・考え方を働かせる学習過程の工夫

　発問を核として「発問Ⅰ→思考→試技（保健の場合は仮説）→発問Ⅱ→再考→対話・表現→振り返り」の流れで学習過程を構成して実践した。

学習指導要領に「見方・考え方」を働かせることが主体的・対話的で深い学びの鍵と示されてい

る。教師主導の授業展開は対話になりにくいため、生徒に話し合い活動の必要性を感じさせ、その中身を変えていかなければならない。生徒は生活の中で様々な「見方・考え方」を無意識に働かせていることが予想されるが、授業ではそこで育てたい資質・能力へと導く必要がある。そのためには、教師の意図的な働きかけによって活動を焦点化し、「見方・考え方」を働かせなければならないと考えた。そこで、学習過程において教師が意図的な働きかけができる手段である「発問」に着目し、対話活動の設定や振り返りなど学習過程を工夫する。

「発問」により、生徒は教科の見方・考え方を働かせなくても考えることができてしまい、一方何をどのように問うかにより、生徒が教科の見方・考え方を働かさないと、課題解決に向かうことができなくなる。つまり、「発問」には、教師の教科の本質に対する深い理解を必要とし、教師自身の「運動やスポーツ、健康の保持増進」への「見方・考え方」が生徒に直接反映するものである。教師が教科の本質を見いだす目を磨き、生徒の育てたい資質・能力を具体的にイメージした意図的な「発問」を投げかけることができてこそ、生徒を「運動やスポーツ、健康の保持増進」に真に向かい合わせ、「見方・考え方」を働かせることができる。このことから、教師の「発問」を起点に様々な課題に対して生徒が主体的に、多様な視点で物事を捉えることを試みたり、多面的・多角的に考えたり、知識を相互に関連付けてより深く理解したりできることをめざした授業づくりを試みようと考えた。そのためには、授業の導入では課題意識を掘り起こし学習活動へと向かわせる、展開では課題解決に向けて再度揺さぶる発問や深い理解へと誘う、振り返りでは自分自身とのつながりを意識させて学習の価値付けをするなど、その「発問」の働きがそれぞれの学習過程に適切であるように吟味することが重要である。本研究では「発問」を、「単元を通した発問」、「生徒の課題意識を掘り起こす発問」、「生徒の考えを再度揺さぶる発問」として設定した。

(3)ＩＣＴを活用した広い学び

ＩＣＴ教育とは、ＰＣ、タブレット端末などを通して情報通信技術を活用した教育を行うことをさし、黒板に板書を行わなくてもデバイス上に視覚的に教材を表示したり、チャットなども活用したり、ＩＴ技術を用いた様々な学びのかたちが想定される。文部科学省は「もはや学校のＩＣＴ環境は、その導入が学習に効果的であるかどうかを議論する段階ではなく、鉛筆やノート等の文房具と同様に教育現場において不可欠なものとなっていることを強く認識する必要がある」という見解を出している。このことから、「生徒にどのような力が必要か」、「そのためにできることは何か」ということを考える際には、ＩＣＴの効果的な活用は欠かせないことが分かる。ＩＣＴの活用には様々な方法があるが、視覚や聴覚に訴えかける分かりやすい教材、リアルタイムでの双方向の情報交換による交流活動の活性化、お互いをつなぐことで情報の共有を図る、学んだことを伝えるために表現するなど、従来の授業では実現することが難しかった学習過程の工夫が可能となる。このことは、生徒が「見方・考え方」を働かせる大変有用な支援になると考えた。

本研究では、多様な考え方に触れたり、異なる視点があることを知ったりすることが生徒を刺激し、「見方・考え方」を働かせることにつながると考え、生徒の考えを「比較する」、「つなげる」、「ひろげる」ことができるような、効果的なICTの活用を試みてみていきたい。

(4) 研究仮説

　教師による発問（「生徒の課題意識を掘り起こす発問」、「生徒の考えを再度揺さぶる発問」、「単元を通した発問」）、学習過程の工夫やＩＣＴの活用等を通して、生徒は見方・考え方を働かせて課題解決に向かうことができ、生涯にわたって運動やスポーツの楽しさを実感し、主体的に活動するようになるであろう。

４　研究授業について

|  |  |
| --- | --- |
| 単　元 | 第３学年　体つくり運動「実生活に生かす運動の計画  実践校　三豊市観音寺市学校組合立三豊中学校 |
| 単元の目標 | ○　ねらいに応じて、健康の保持増進や調和のとれた体力の向上を図るための運動の計画を立  て取り組むことができる。  ○　自己やなかまの課題を発見し、合理的な解決に向けての運動の取り組み方を工夫するとと  もに、自己やなかまの考えたことを他者に伝えることができる。  ○　互いに助け合い、一人一人の違いに応じた動きを大切にして自主的に取り組むことができ  る。 |
| 学習指導計画（全８時間）   |  |  |  | | --- | --- | --- | | 単元を通した問い  「仲間と協力して目的に適した運動の組み合わせ方を理解し、実生活に生かす運動の計画を立てるにはどうすればよいか？」 | | | | 時 | 学習計画 | | | １ | 体つくり運動とは  何だったか？ | オリエンテーション  既存エクササイズの実施  ＩＣＴの使い方説明 | | ２ | どんな運動が必要だろうか？ | グループに分かれて、目的別にエクササイズを検索する | | ３  ４ | どんな組み合わせが効果的だろうか？ | 時間とリズムに合わせて、動きを組み合わせる | | ⑤ | このエクササイズの良さや課題は  何だろうか？ | 兄弟グループのエクササイズを評価する　【本時】 | | ６ | 評価をもとに、エクササイズを修正する | | ７ | 他の班の良いところはどこだろうか？ | 三中エクササイズ選手権  他の班のエクササイズを行い、相互評価をする | | ８ | 運動を習慣化  するにはどうすれば良いだろうか？ | 自分に合った運動の計画を立てる  （※発展的に個人が行う） | | |
| 本時について（５／８）  ＜授業の概要＞　「自分たちのエクササイズの良さや課題は何か。」  　グループで作成したエクササイズを、兄弟グループで相互評価し、エクササイズを修正していく。その際、教師の発問やICT（ジャムボード）の活用等によって主体的・対話的に学びが深められるようにしていく。 | |

５　分科会提案について

|  |  |
| --- | --- |
| 坂出・綾歌支部 | 支部テーマ「生徒が学びを実感できる保健体育学習の充実」  　「深い学び」の実現に向けて、生徒一人ひとりが協働的な学びの中で自己有用感や運動の楽しさを感じながら、主体的に学び、資質・能力を身に付ける指導の在り方について研究を進めた。特に、以下の３つに重点を置いて研究を進めた。  ①　生徒が考えをもてる学習課題の開発  ②　生徒が学びを実感できる単元構成の工夫  ③　自己の健康・スポーツ観の変容につながる振り返りの工夫 |
| 仲多度・善通寺支部 | 支部テーマ「男女共習の保健体育学習の可能性」  　多様な考え方や価値観に触れ、学びを深めることや、小学校から高等学校までの系統立った学習の構成、生涯スポーツや日常生活で活用する力を育成できる保健体育学習の在り方について研究を進めた。特に、以下の３つに重点を置いて研究を進めた。  ①　技術的なポイントやなかまと自分自身の変容に気付くことを引き出すための手立て  ②　考えや思いを表現してなかまに伝えるための学習活動の工夫  ③　ICT機器活用による学習支援の方法 |